

暴れ馬に乗り、アルカディアを行く

小松で日曜日を過ごしたバードが、宿を出ることになった。野次馬はさらにふくれあがり、旅館の中に60人、外には1500人が集まっていた。

バードがこれまで乗った馬は全て牝馬。13峠の萱野峠から黒沢峠までは牝牛で、おとなしかった。しかし、この日用意されていたのは、〆頭の牡馬だった。見るからに凶暴な顔をしている。

バードが馬に乗ると、1500人の野次馬ががついてきた。しかも、その数はどんどんふくれあがっていく。野次馬の下駄の音、群衆の発する声と一緒になっていたいそう騒がしい移動となった。そんな経験のない馬は、異常に興奮し始めた。そして、ついに頭についている縄を引きちぎった。驚いた馬子が、馬から手を離すと、馬は後足で立ち上がり、ヒヒーンと叫びながら、前脚で群衆を蹴散らしている。群衆は、馬に驚きて右へ左へと逃げまどっていた。バードは馬のたてがみを必死でつかみ、しがみついていた。

振り返ると、イトーはすでに馬から落ちて、地面にたたきつけられていた。警察署の前に差し掛かった時、4人の警官が飛び出してきて、バードの馬を取り押さえ、馬子にひきわたした。しかし、野次馬がついてくると馬は再び大暴れしながら、進んでいく。



暴れ馬に悩まされながらも、バードの目は米沢平野をしつかりととらえていた。南に繁栄する米沢の城下町があり、北には湯治客であふれる赤湯がある。豆、茄子、くるみ、西瓜、きゅうり、杏子、ザクロをたくさん栽培している。大地は、実り豊かに微笑んでおり、まさにアジアのアルカディアと言ってい

い。  
驚いたのは、明治の新しい時代の波が、ここにも到達していたことだった。渡し船で川を渡ると幅7メートル半の真新しい道ができていた。両側に堀が掘られ、道に沿って電柱が並んでいる。立派な身なりをした歩行者、人力車、馬、荷車が通っていた。それは素晴らしい馬車道だが、たったひとつ足りないものがあつた。肝心な馬車が通っていない。西欧化し立派な馬車道を人力車が通るのは、バードの目にはとても奇妙に映った。



赤湯に着くと、馬市が出ていた。バードたちの乗った馬はひどく興奮し、イ  
トーは再び地面に投げ出された。バードが馬から下りると、馬は後ろ足で棒立  
ちとなりバードにおそいかかってきた。驚いたバードがつまずいて倒れると、  
歯で噛みつきこうとしてきた。馬子がなんとか取り押さえてくれた。

疲れ果てたバードは赤湯に泊まりたいと思ったが、この温泉は湯治客でごっ  
た返していた。宿屋には40の部屋があり、リユーマチの湯治客が休んでい  
た。その客が三味線をボロンボロンとかき鳴らし、琴をキーキーと弾いてい  
る。温泉にはひかれるが、この雑音には耐えることができない。そう思ったバ  
ードは、次の温泉に行こうと決意した。